

が必要です。そうでなければ、悪いことをなくそうとして、良いことも失ってしまう間違いを犯すことになるかもしれません。

海外で生活した日本人も、外国から日本を見る目を持っています。その目を持って見れば、日本の現状の中に希望を見ることができるとも思いません。私たちには見つけにくい道が見えてくることもあるでしょう。帰国生が日本の学校に対して持つ素朴な疑問が、日本の学校を時代に合ったものに変えて行くためのヒントを与えてくれることを、私たちは期待することができます。

◆外国の良さを

「生徒が活発に参加する授業」は、ずいぶん前から日本でも望ましいと考えられています。ところが、授業のスタイルの進化はなかなか進んでいないようです。「日本の中学生は、なぜ授業中に発言をしないのか」という感想は、帰国生からよく聞きます。おそらく、日本の中学生の多くは生徒が活発に発言しながら進めて行く授業を経験したことがなく、その楽しさを想像することも難しいのでしょう。もしかしたら、先生もそうかもしれません。実際に生徒が積極的に参加する授業を体験した帰国生がいることは、授業を良い方向に変えて行くために大きな力となるはずで

「お店の人が『いらっしゃいませ』と言ったら、どう返事をすればいいですか。」という質問をアメリカ育ちの子にされたときには、一瞬戸惑いました。日本では、お店の人のあいさつにいちいち返事をする人は少ないからです。「こんにちは』でいいと思いますよ。」と答えた私は、それから、自分でもお店の人の「いらっしゃいませ」に答えるようにしています。その方が、前よりも気持ち良く店に入れるような気がします。人間関係は、私たちの一番大きな悩みの一つですが、外国で日本とはひと味違う人付き合いを身につけて来た人たちに教えられることは少なくありません。

◆「帰国子女受け入れ」の積極的な意味

1980年代のころにも、帰国生の受け入れが注目された時期がありました。当時は、帰国生が日本の学校にうまくなじめず、いろいろなトラブルが起きていました。帰国生の多い地域には、専任の教員が配置されたり、受け入れ推進校や推進地域が指定されたりしました。そのころにも、帰国生の存在が日本の学校に良い変化をもたらしてくれるのではないかと期待する人も



宿泊体験 - 日本の良さを見つけて。(学園内の北泉寮前にて)

いました。私もその一人でしたが、残念ながら、そうはなりません。いろいろな情報が伝えられることによって、帰国生の方が日本の学校に適応しやすい準備をするようになった結果、大きなトラブルが報告されることが少なくなり、帰国生の問題に対する関心がうすれていったのです。帰国生の数が大勢に影響を与えるには少な過ぎたと言うこともあるでしょうし、当時は日本の学校も自信にあふれていて、どうしても変わらなければならないという緊迫感はなかったように思います。

しかし、時代は変わりました。例えば、啓明学園では、2学期の初めに初中高合わせて31人の帰国生を迎えました。初等学校（小学校）だけでも13人が一度に編入し、約330人の児童のうち、海外生活経験者が100名を越えました。こうなると、帰国生は決して少数派とは言えず、出来上がった日本の学校の中に少数の帰国生が適応していくという図式はもはや成り立ちません。国内で育った子どもたちも、いろいろな体験を持つ子どもたちの中で自分を見つめ直し、さまざまな価値観にふれながら自分の考えを育てていくことになるでしょう。

今、日本の学校は新しい道を探しあぐねていますが、帰国生を受け入れることが、新しい希望につながる可能性は十分にあります。私たちは、そのことを目に見える形で示していきたいと思



アメリカの現地校と日本の公立そして私立の学校で、先生としてのご経験を積んでこられた佐々先生の、日本の教育・学校や社会の現状への感想や見方がうかがえる、興味深い文章です。

佐々先生、新学期のお忙しい中、貴重な原稿をありがとうございました。思えば、かつての帰国子女教育ブーム(?)は、企業戦士を海外へ送り出すための「官」と企業の作戦だったような気がします。パブルがはじけて、「帰国子女教育は終わった」と言われました。

最近、海外の子どもが受けた教育を、日本の子ども達に紹介する仕事の多くなった私の経験からも、帰国した子ども達の教育は、彼ら自身のためだけでなく、日本の子どものためにも必要だ、と考えるようになりました。新しい帰国子女教育を考える時期では?

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター
〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15
電話：042-541-1003
ホームページ：www.keimei.ac.jp
Eメール：kokusai_info@keimei.ac.jp